

国頭村宜名真沖で沈没した異国船の調査研究

片桐 千亜紀¹⁾・宮城 弘樹²⁾・新垣 力³⁾・山本 祐司⁴⁾・渡辺 美季⁵⁾

Research studies of ginama foreign ships wreck sites in Kunigamison, Okinawa, Japan
Chiaki KATAGIRI ¹⁾, Hiroki MIYAGI²⁾, Tsutomu ARAKAKI ³⁾,
Yuji YAMAMOTO ⁴⁾, Miki WATANABE ⁵⁾

1 はじめに

沖縄県国頭村宜名真集落の南のはずれに「オランダ墓」と呼ばれる記念碑が立っている(写真1・2)。この記念碑は、1874(明治7)年^{註1)}に英国商船が宜名真沖で座礁・沈没した事件とその顛末を記念するものであり、地下にはこの時漂着した船員の遺体が眠っている。『沖縄県国頭郡志』(島袋1919)や『国頭村史』(国頭村役場編集1967)にはその事件のことが記載されている。

このような記念碑が建立される社会的背景はどのようなものだったのか。琉球王国末期、王国が支配する海域には異国船と呼ばれる西欧船が頻りに姿を見せた。それは、西欧列強によるアジア進出の波が、琉球王国にまでその影響を及ぼしていたことを示す。異国船来琉の記録は豊富に残されており(たとえば須藤1974、山口2000)、また当博物館が所蔵する19世紀的那覇港の様子を描いた『首里那覇港図屏風』には、はるか水平線のかなたに異国船が描かれている(図1)。このような異国船の中には、漂着・座礁・沈没するものもあった。石垣島唐人墓に関するロバート・バウン号の座礁事件は有名である(西里2005)。このような歴史的背景を鑑みると、宜名真で起きた英国船の座礁・沈没事件は特別なものとは

言えないかもしれない。しかし、この事件に関してすでに多くの陸上遺物が確認されている点では特異なケースであると言える。王国末期に来琉した異国船の座礁・沈没の実態について詳細を把握すること



写真1 オランダ墓の墓碑
中心に事件の顛末が彫り込まれている。

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

2) 名護市教育委員会 〒905-0021 沖縄県名護市東江1-8-11

Nago City board of education, 1-8-11, Agarie, Nago, Okinawa, 905-0021, Japan.

3) 沖縄県立埋蔵文化財センター 〒903-0125 沖縄県西原町字上原193-7

Okinawa Prefectural Archeological Center, 193-7, Uehara, Nishihara, Okinawa, 903-0125, Japan.

4) アジア水中考古学研究所 〒812-0041 福岡県福岡市博多区吉塚6-10-12-308

Asian Reserch institute of Underwater Archaeology, 6-10-12-308, Yoshizuka, Hakataku, Fukuoka, Fukuoka, 812-0041, Japan.

5) 神奈川大学 〒221-0802 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Kanagawa University, 3-27-1, Rokkakubashi, Kanagawa-ku, Yokohama, Kanagawa, 221-0802, Japan.



写真2 オランダ墓 周囲をベナレスが積載していた方形花崗岩で囲んでいる。



図1-1 首里那覇港図屏風

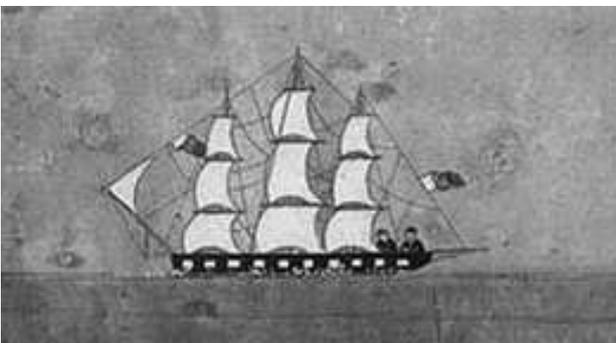


図1-2 同図拡大

は困難であり、考古学的研究はアプローチそのものが少ないのが現状である。それは第一に、事件の痕跡が陸上に残されていることが少ないからである。宜名真の英国船に関しては、すでに陸上遺物が確認されているため、対応する水中遺物と文献史料が発見できれば、王国末期に来琉した異国船の海難実態の解明は大きく前進する可能性がある。

2003年4月29日、筆者らはこのオランダ墓の存在を手掛かりに宜名真沖海底の調査を行い、中国清朝陶磁器等が海底に散布する状況を確認した(宮城・

片桐他2004)。以後、沖縄県立埋蔵文化財センター(片桐編2007、2010)や南西諸島水中文化遺産研究会によって、この海域の水中調査(片桐2010b)と事件にまつわる文献調査が継続的に実施されており、異国船や事件の実態が次第に明らかになりつつある。近年、この異国船は1872年に香港を出発し、サンフランシスコへ向かう途中に沖縄島宜名真沖で座礁・沈没したイギリス船ベナレス(船長:ジェームズ・アンダーソン)であることが明らかとなった(渡辺2010)。

本稿ではこれらの成果についてまとめ、琉球王国末期の異国船の実態について迫る。

2. 文献記録に残されたベナレス

宜名真のオランダ墓に関する文献記録はこれまで後世の史料・資料・伝聞として『沖縄県国頭郡志』(1919)、『国頭村史』(1967)、『奥のあゆみ』(1986)が知られていたが、当時の様子を直接伝える琉球史料・日本史料・イギリス史料などは未発見であった。しかし、2003年に宜名真沖で遺跡の存在が確認されて以来、筆者の一人である渡辺が精力的な文献探査を行った結果、課題となっていた当時の記録を残す「琉球藩在勤来往翰」(レファレンスコードB 03041 138900、外務省外交史料館蔵)、『東汀随筆』(喜舎場朝賢、至言社、1980年)、F.O.17(イギリス国立公文書館所蔵外務省文書)等の中にまとまった記録を確認することができた。以下、文献調査の結果明らかとなったベナレス漂着・沈没事件の概要についてまとめるが、文献記録の成果だけでも膨大な枚数を必要とするため、詳細については渡辺(2010)や渡辺・新居(2013)の別稿を参照されたい。

1872(明治5)年9月13日、イギリス商船ベナレス号(船長:ジェームズアンダーソン)が香港を出港しアメリカへ向かった。

乗組員は18名で全員欧米人(船長の息子レイを含む全員の氏名が判明)。

船には茶・砂糖・米等の商品が積載されていた。同年10月6日、琉球近海で海難に遭い、沖縄宜名真沖で座礁・沈没した。

乗組員18名中13名が死亡(船長やその息子を含む)、5名が生存。

4名の遺体が漂着し、琉球人によって宜名真に埋

葬された。

これが、船と事件の概要である。アメリカへ向け香港を出航したイギリス船ベナレス号はその目的を果たすことなく沖縄宜名真沖で座礁・沈没した。文献調査からその後の顛末など様々なことが明らかとなっている。さらに、この船と事件の実態を示す考古学的資料を陸上・海底で確認することができた。

3. 遺跡と関連遺物の位置

宜名真沖海底遺跡は国頭村宜名真集落前面の海底に存在する（図2・写真3）。海はリーフが発達しておらず、ラグーンを形成しない。遺物は水深数メートルのリーフ上から、沖へ向かって礁斜面を越え、水



写真3 宜名真沖遠望（黄金森から）



図2 遺跡及び陸上関連遺物の位置

深10mを超える砂地の海底面にかけて散布する。最も多く確認されるのはリーフ礁斜面であり、砂地で確認されるものは僅かである。砂地であまり確認されない理由として、遺物が現在も砂の中に埋没している可能性がある。リーフに存在する遺物はサンゴの発達によって固定されているものも多い。発達したサンゴを注意深く観察することによって、様々な遺物がサンゴに取り巻かれている状況を確認できる。沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した分布調査によってその範囲が示されており、概ね海岸線に沿って250m、沖へ向かって210mの広範囲となっている（図3、片桐2010a）。

この遺跡は1872（明治5）年に座礁・沈没したイギリス船ベナレスの残骸と考えられるが、この船の鉄錨や積載品と考えらえる遺物が国頭村宜名真・奥・宇嘉、大宜味村大兼久、今帰仁村上運天で確認されている（図2）。

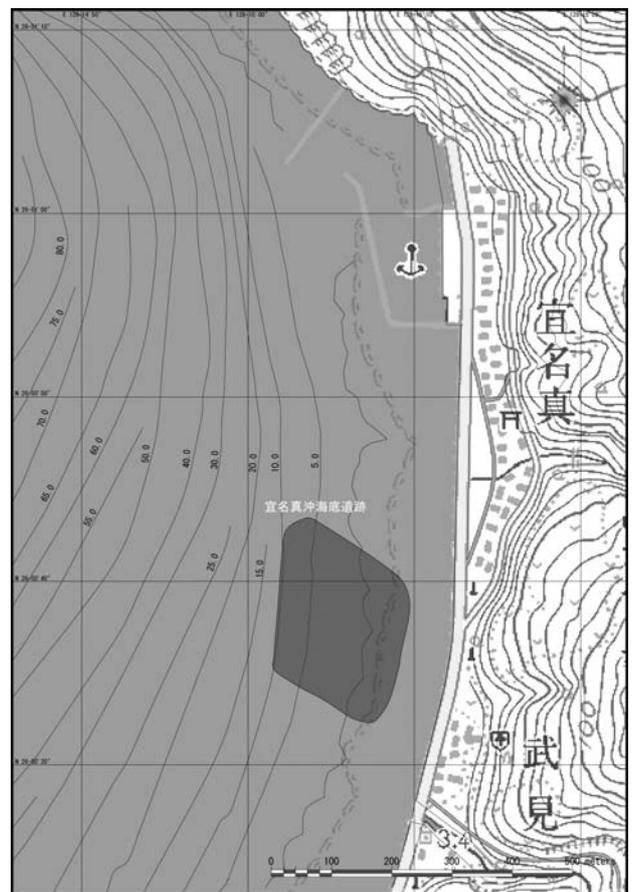


図3 宜名真沖海底遺跡

4. 調査略歴

本遺跡は2003年に確認されて以来、数度にわたる調査が実施されてきたため、ここで調査歴についてまとめておく。

第一次調査（2003年4月29日） 宮城弘樹を代表とした笹川科学研究助成「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査 - 海洋採集遺物からみた海上交通 -」プロジェクトによる調査（宮城・片桐他2004）。宮城弘樹（今帰仁村教育委員会：当時）、片桐千亜紀・新垣力（沖縄県立埋蔵文化財センター：当時）、中山晋（沖縄県教育庁文化課：当時）、比嘉尚輝・松永洋平（浦添市教育委員会：当時）が参加した。宜名真集落前面の海底に遺物が散布する状況を初めて確認した。シュノーケルによる目視調査で、遺物は中国清朝磁器。

第二次調査（2005年6月8・15日） 沖縄県立埋蔵文化財センターによる分布調査（片桐2007、2010a）。片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿が参加した。2003年に確認されていた清朝磁器に加え、中国褐釉陶器、ヨーロッパ陶器、フォーク、船体の残骸である船釘が散布する状況を確認した。また、GPSを利用して遺跡の範囲を確認した（図3）。調査にあたっては国頭村教育委員会山城兼一の協力を得た。

第三次調査（2009年7月19日） アジア水中考古学研究所（以後、ARIUA）を代表とした日本財団助成「日本財団助成を受けた海の文化遺産総合調査プロジェクト - 水中文化遺産のデータベース作成と水中考古学の推進 -」プロジェクトによる調査（片桐2010b）。南西諸島については、渡辺芳郎教授を代表とする鹿児島大学法文学部異文化交流論研究室と

宮城弘樹を代表とする南西諸島水中文化遺産研究会がそれぞれ鹿児島県・沖縄県海域を担当した。調査は、宮城弘樹（今帰仁村教育委員会：当時）、片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター：当時）、渡辺美季（神奈川大学）、崎原恒寿（恩納村教育委員会）、黒沢健明（今帰仁村教育委員会：当時）、山田浩久（宜野湾市教育委員会：当時）、輝広志・喜納大作（那覇市歴史博物館：当時）、新垣夢野（神奈川大学大学院生：当時）、島袋綾野（石垣市八重山博物館）、新里亮人（伊仙町教育委員会）、塩屋勝利・常松幹雄（ARIUA 理事）、渡辺芳郎・新里貴之（鹿児島大学）、松尾直子（（株）埋蔵文化財サポートシステム）が参加した（写真4）。

今後のプロジェクトを実施する上で、南西諸島の水中遺跡の様子について共通認識を得る目的で実施し、これまで確認されていた遺物に加え、ヨーロッパガラス瓶や船体の一部である銅板等が確認された。

第四次調査（2011年6月10～12日） 調査主体は第三次調査同様。潜水調査には、片桐千亜紀（沖縄県立博物館・美術館）・山田浩久（宜野湾市教育委員会：当時）・木口祐史（（株）パスコ）・新里亮人（伊仙町教育委員会）・小西美香（琉球大学理学部学生：当時）、山本祐司（水中カメラマン）が、陸上では宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）・喜納大作（那覇市歴史博物館）・新垣力（沖縄県立埋蔵文化財センター）・翁長武司（（株）パスコ）が調査を実施した。調査にあたっては、国頭村教育委員会の赤嶺信哉、宮城 邦昌・宮城宏光・親川栄氏らの協力を得た。本調査はこれまでの調査の内、最も規模の大きい調査となった（写真5）。



写真4 宜名真沖調査風景（2009年）



写真5 集合写真（2011年）

個々の遺物分布状況とその内容把握のため、GPSを利用して海底に残された遺物の位置情報を座標で記録した。その結果、これまで確認された遺物に加え、バターナイフと考えられる金属製品や船体の一部である木製滑車が確認された。また、GPSを利用して個々の遺物の散布位置、水深、内容、確認された遺物の範囲を地図上で把握することができた。第四次調査の概要については次節にて記す。

5. 第四次調査の概要

5-1 目的

第四次はGPSを利用して個々の遺物座標・水深を取得すること、その内容を確認し、すべての遺物散布状況について写真記録を残すこと、それらをまとめて図化することによって遺物散布範囲とその状況を記録することを目的とした。そのため、これまでの調査で最も充実した調査体制となった。

5-2 調査体制

潜水班 調査管理 片桐千亜紀
 潜水作業 山田浩久・新里亮人・小西美香
 GPS測量 木口祐史
 写真記録 山本祐司
 陸上班 全体管理 宮城弘樹
 陸上作業 喜納大作・新垣力
 陸上測量 翁長武司
 協力 宮城邦昌・宮城宏光・親川栄・赤嶺信哉・他

5-3 調査内容

5-3-1 調査方法

潜水調査の開始にあたっては、過去の座標データをもとにGPSを利用して、船を最も遺跡の近くに停泊させ（写真6）、潜水位置の確認等を行った。まず、潜水調査班は遺物の分布位置と状況を確認するため、全員でスキューバ潜水を実施（写真7）。山田・新里、小西・木口の2班に分かれ、目視調査による遺物集中域の確認を行い、確認されたそれぞれの遺物についてピンポール等によって目印の設置を行った。同時に陸上班は陸上での測量（写真8）を行った。その後、それぞれの遺物の位置を示すピンポール等に防水の荷札を使って遺物のナンバリングを行った。片桐は全体の調査状況の管理、山本は調査状況の写真記録を担当した。遺物はすべて元位



写真6 船上での遺跡の位置確認



写真7 海底調査風景



写真8 陸上での測量風景

置から動いており、台風等の波の力によって移動を繰り返しているものばかりであった。さらに、海底調査では、陸上に引き揚げられている巨大な方形花崗岩を海底でも確認するために、地元の方の聞き取りによって得られた海域の探査を行ったが、発見には至らなかった。

次に、GPSを利用して海面にて遺物の座標取得を行い、海底では遺物の水深、内容を確認し、海底に露出して散布する遺物すべての写真撮影を行った。まず、海底の透明度が良い内に、山本・片桐が先行



写真9 写真撮影（完形ワイビン瓶）



写真11 GPS 座標取得作業（海面）

して潜水し、すべての遺物の写真記録作業を行った（写真9）。時間差を設定し、続けて木口がシュノーケルによって、山田・新里・小西がスキューバによって潜水した。潜水調査者は海面に浮かべたブイをロープに繋いだものを持ち、目的の遺物にロープを合わせ、可能な限り水面と垂直になるようにした（写真10）。その状態で木口がシュノーケルによって海面に浮いたブイの位置座標を記録した（写真11）。これは海底に持ち込むことができるGPSがないためである。後述するGPSの機械上の誤差と、張られたロープが潮流に流されるなどして実際の海底遺物の位置座標とは離れてしまう事もあるが、動き続けている遺物のおおよその位置関係と範囲を把握する程度ならば、問題は少ないと判断した。GPSはアウトドア用ハンディGPSで、ガーミンのeTrex VentureHCである。あくまでも普及用のハンディGPSの為、解像度（精度）が0.1秒単位となっている。このため実際の距離では約3m間隔のデータとなる（厳密には東西3m×南北2.5mくらい。こ



写真10 GPS 座標取得（海底）

れは観測する経緯度によって異なる）。よって、同一の3mメッシュの中にあるデータは、同じ点でプロットされてしまうというのが当該調査の課題点となる。精度上の課題点はあるが、海底に半ば浮遊する形で散布する遺物群のプロットを行い、範囲確認を目的とする遺跡の位置的な記録とその内容を把握するという当初目的は達成できた。

海底では水深計を用いて当該時間の水深を計測したが、それはあくまで水深であり標高ではない。標高を出すためには、時間・分単位で刻々と変化する潮位を陸上で記録し、同時刻に計測した水深と比較することによって計算する方法があるが、これにはさらなる人材と時間・予算がかかるため、今回は略式ながらも目的を達成することのできる記録方法を採用した。

また、山本は座標記録を取得したすべての遺物の近影写真を撮影した。

最後に、散布遺物の現状（海底に露出して動きつづけており、遺物そのものが保存可能な環境ではな



写真12 遺物回収

い)などを考慮して国頭村教育委員会と協議の上、海底に散布する遺物の回収を実施した(写真12)。実際の海底はこれ以上の遺物を目視確認することができたが、中にはサンゴ礁に完全に取込まれ、よほど訓練された者が確認しなければ、遺物と認識できない状態のものも多数ある。このような遺物については、サンゴ礁内に保存されていると考えられるため、回収等は行っていない。

以上の調査によって、目視した海底遺跡の状況を可能な限り復元することが可能となった。

5-3-2 学習会の実施

6月11日の夜には、国頭村ふれあいセンターにて、今回の調査成果を中心としつつ、国頭村教育委員会や地元郷土史家との学習会を実施し調査成果の報告及び情報交換を行った(写真13)。その内容は以下のとおり。

1. オランダ墓について(宮城宏光)
2. 宜名真沖海底遺跡調査の概要(片桐千垂紀)
3. 出土遺物の紹介(新垣力)
4. 文献調査の概要(宮城弘樹)

宮城宏光氏はこの異国船について英国大使館や開国資料館へ問い合わせを行うなど、筆者らが本事件の調査を始める以前から精力的な調査を実施されていた、また、宮城宏昌氏らもこの異国船について聞き取り調査等を精力的に実施されている。本事件の実態解明のため、様々な研究機関や地元教育委員会、地元郷土史家の方々とも協力して調査研究を進めており、理想的な研究体制と考えられる。



写真13 学習会の状況

6. 遺跡の状況

6-1 遺物分布状況

これまでの調査によって、遺物が集中的に散布する位置が確認され、遺物散布範囲を具体的にすることができた。遺物が集中的に散布する海域は船そのものが座礁・沈没した場所に限りなく近い場所であると考えられる。沖縄県立埋蔵文化財センターが作成した遺跡地図を見ると、遺物の範囲は海岸線に沿って概ね250m、沖に向かって210mの範囲に分布しているが(第2図)、その中心地は第4図に示すように、リーフ礁斜面を中心に海岸線(南北)にそって概ね140m、沖に向かい(東西)50mの範囲に特に集中していることが把握された。第4図はオルソ補正した航空写真に遺物座標を重ねたもので、記号はそれぞれの遺物の種類を、ナンバーは調査時の遺物ナンバーを示している。回収した21点の遺物の散布状況写真及び2003年以降の調査で確認された遺物散布状況の写真を14~38に示す。

遺物の分布状況は礁斜面に集中する傾向を示している。これは遺物が露出しているため、波の力によって陸側へと移動を繰り返した結果、中間的・集中的に留まるのが礁斜面(最終漂着地点は海岸砂丘)であるという、合理的な理由によるものだろう。しかし、これらの散布状況は異国船の座礁・沈没、積み荷等を含む遺物流出の行程と連関する位置情報と考えられる。また、異国船の座礁そのものが礁斜面(水深3m~5m程度)だった可能性が高く、これも礁斜面周辺に遺物が密集する理由となっている。これによって、異国船の座礁・沈没地点をさらに絞り込んでいる可能性が高い。海底の状況は、礁縁底

宜名真沖（1872年英国船ベレナス号）

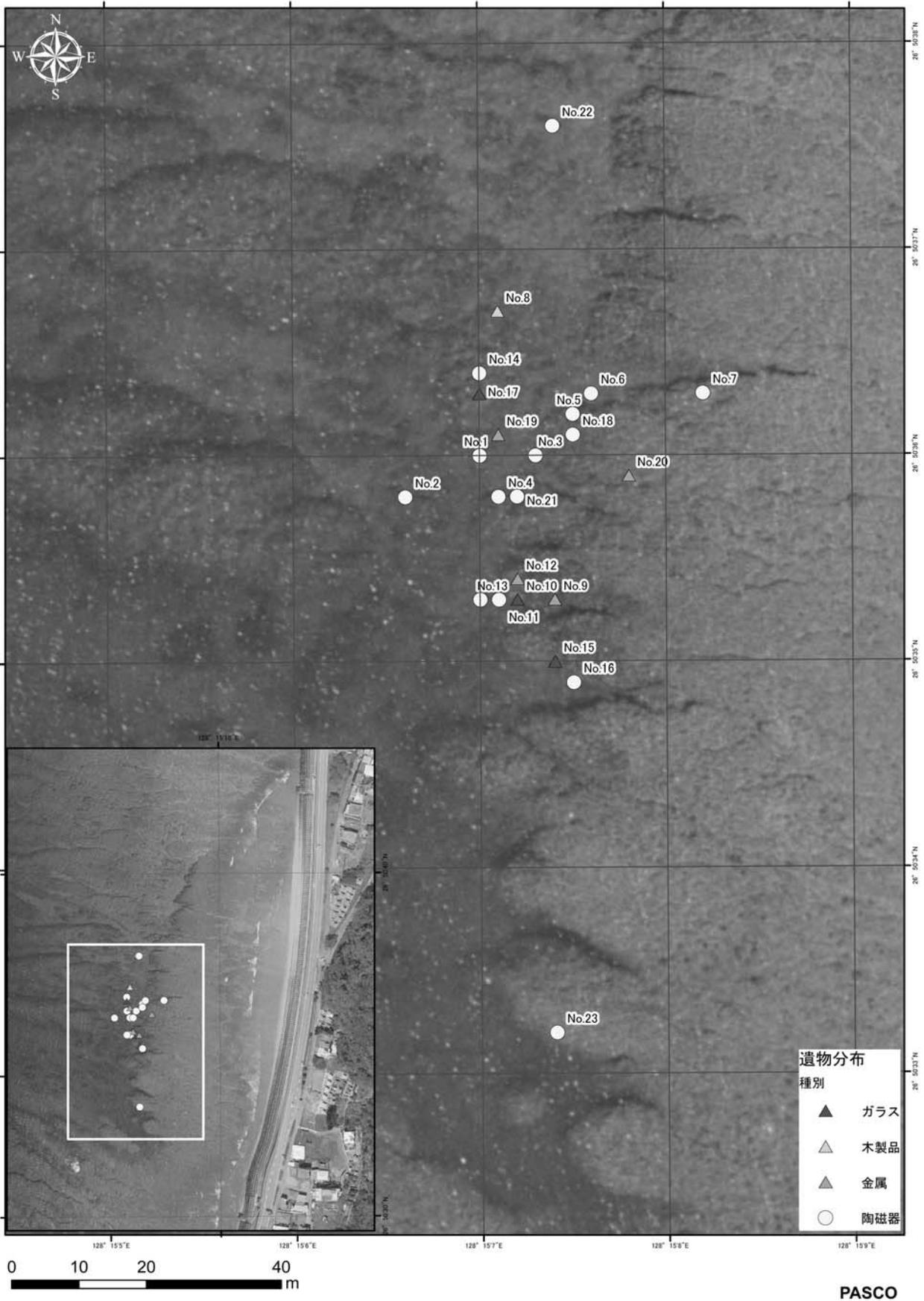


図4 遺物詳細分布状況

表 1

遺物 No.	種別	遺物	部位	場所	水深_m	観測日	観測時刻	北緯	東経
No.1	陶磁器	青花碗	底部	リーフ下海底面	7.5	2011-06-11	12:22	26-50-36.0	128-15-06.9
No.2	陶磁器	青花碗	口～底	リーフ下珊瑚塊	7.1	2011-06-11	12:36	26-50-35.8	128-15-06.5
No.3	陶磁器	褐釉陶器壺	口縁部	リーフ下海底面	6.4	2011-06-11	12:23	26-50-36.0	128-15-07.2
No.4	陶磁器	大型褐釉陶器壺	底部	リーフ下海底面	6.6	2011-06-11	12:20	26-50-35.8	128-15-07.0
No.5	陶磁器	褐釉陶器壺・蓋	口縁部	リーフ下海底面	6.7	2011-06-11	12:25	26-50-36.2	128-15-07.4
No.6	陶磁器	青花碗	口縁部	リーフ下海底面	6.2	2011-06-11	12:26	26-50-36.3	128-15-07.5
No.7	陶磁器	褐釉陶器壺	底部	リーフ上	2.0	2011-06-11	3:09	26-50-36.3	128-15-08.1
No.8	木製品	滑車	完形	海底面砂地	7.2	2011-06-11	12:31	26-50-36.7	128-15-07.0
No.9	金属	船釘 船体銅板 石製品	完形	リーフ上	5.0	2011-06-11	12:18	26-50-35.3	128-15-07.3
No.10	ガラス	ヨーロッパワイン瓶	底部	リーフ上	5.6	2011-06-11	12:17	26-50-35.3	128-15-07.1
No.11	陶磁器	ヨーロッパ陶器	口縁部	リーフ上	6.0	2011-06-11	12:14	26-50-35.3	128-15-07.0
No.12	金属	船体銅板	破片	リーフ下珊瑚塊	6.0	2011-06-11	12:19	26-50-35.4	128-15-07.1
No.13	陶磁器	青花碗	口縁部	リーフ下海底面	7.6	2011-06-11	12:16	26-50-35.3	128-15-06.9
No.14	陶磁器	褐釉陶器壺	口縁部	リーフ下海底面	7.8	2011-06-11	12:33	26-50-36.4	128-15-06.9
No.15	ガラス	ヨーロッパワイン瓶	底部	リーフ下海底面	7.0	2011-06-11	12:10	26-50-35.0	128-15-07.3
No.16	陶磁器	褐釉陶器壺	口縁部	リーフ下海底面	6.8	2011-06-11	12:12	26-50-34.9	128-15-07.4
No.17	ガラス	ヨーロッパワイン瓶 コルク	完形	リーフ下海底面	6.5	2011-06-11	12:34	26-50-36.3	128-15-06.9
No.18	陶磁器	褐釉陶器壺	口～底	リーフ上	2.7	2011-06-11	3:16	26-50-36.1	128-15-07.4
No.19	金属	船釘	先端部	リーフ上	2.4	2011-06-11	3:28	26-50-36.1	128-15-07.0
No.20	金属	金属製品(バターナイフ) 白磁碗	先端部 底部	リーフ上	4.8	2011-06-11	3:32	26-50-35.9	128-15-07.7
No.21	陶磁器	銅版	破片	リーフ上	3.4	2011-06-11	3:36	26-50-35.8	128-15-07.1
No.22	陶磁器	青花碗	底部	リーフ下珊瑚塊	5.2	2011-06-11	11:50	26-50-37.6	128-15-07.3
No.23	陶磁器	褐釉陶器壺	胴部	リーフ下海底面	4.3	2011-06-11	12:00	26-50-33.2	128-15-07.3



写真14 遺物 1 青花碗



写真18 遺物 5 褐釉陶器壺・蓋



写真15 遺物 2 青花碗



写真19 遺物 6 青花碗



写真16 遺物 3 褐釉陶器壺

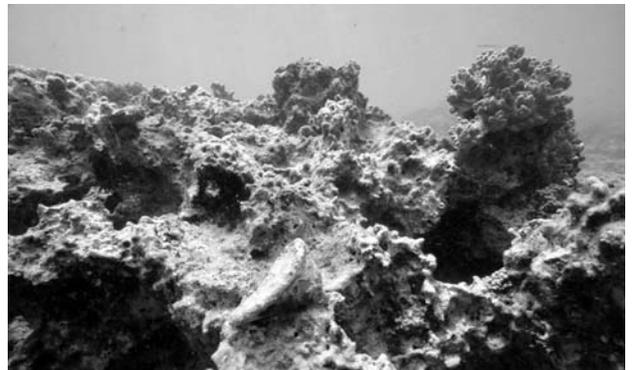


写真20 遺物 7 褐釉陶器壺



写真17 遺物 4 褐釉陶器壺・蓋



写真21 遺物 8 木製滑車



写真22 遺物 9 船釘



写真26 遺物 13 青花碗



写真23 遺物 10 ヨーロッパワイン瓶



写真27 遺物 14 褐釉陶器壺



写真24 遺物 11 ヨーロッパワイン陶器



写真28 遺物 15 ヨーロッパワイン瓶



写真25 遺物 12 船体銅版



写真29 遺物 16 褐釉陶器壺

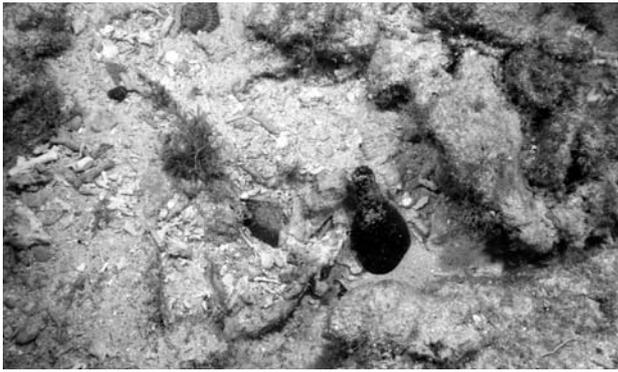


写真30 遺物 17 ヨーロッパワイン瓶

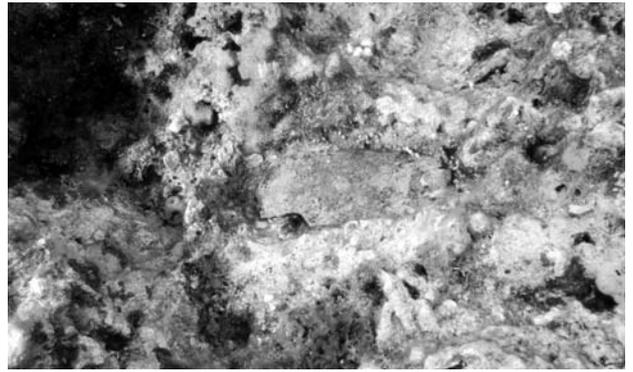


写真34 遺物 21 船体銅版



写真31 遺物 18 褐釉陶器壺



写真35 青花碗



写真32 遺物 19 船釘



写真36 褐釉陶器壺



写真33 遺物 20 バターナイフ



写真37 フォーク



写真38 船釘

面から沖に向かって砂地が広がり、徐々にその深度を深くしていく。現在もこの砂の中にはベナレス座礁起源の遺物や場合によっては船体残骸が保存されていると考えられる。

遺物の保存状態は資料によって異なるが、口縁部～底部までの復元が可能な清朝磁器 (No. 1) や、バラバラに破損しているが、全部回収することによってかなりの復元が可能と思われる褐釉陶器 (未回収)、完形のヨーロッパワイン瓶 (No.15) やバターナイフ (No.20)、木製滑車 (No.18) 等、保存状態良好なものも多い。これらの資料は、おそらく一定期間海底の砂に埋没しており、波等の影響を受けなかったことにより、長期間保存されていたものと考えられる。それが、調査直前に沖縄に近づいた台風等の激しい波と砂の動きによって海底堆積土砂等より露出し、今回たまたま確認されたものであろう。その反面、かなりの小破片となっている遺物も見られた。これら逆に、完全に露出した遺物が波の力によって何度も移動を繰り返し、激しい衝撃によって徐々に破損を繰り返した結果と考えられる。このことから、宜名真沖海底遺跡の保存状態は決して安定的な状況であるとは言い難い。

6-2 海底で確認されたベナレス積載品

これまでの調査で陸上や海底から回収された遺物は、およそ中国産とヨーロッパ産に大別される (日本産も含む可能性がある)。商品や船員の持ち物と言った積荷として、中国産清朝磁器 (青花)・褐釉陶器、ヨーロッパ産硬質陶器、ヨーロッパガラス瓶 (ワイン瓶)、フォーク・バターナイフ等金属食器、中国産又は日本産色絵磁器、船体の残骸として船釘・

銅板等の金属製品、木製滑車がある。また、陸上には花崗岩石製品、西欧鉄錨が知られている。中国産は陶磁器と花崗岩石製品、ヨーロッパ産は陶器、ワイン瓶と考えられるガラス瓶、そして船体の残骸である。

図5はこれまで陸上や海底から確認されたベナレス積載品を図・写真で表しまとめたものである。2011年調査で回収された遺物の詳細については、新垣 (2013) に詳しい。

中国製品 1～10は中国産清朝磁器である。すべて同一器形、同一文様の青花碗であり、バリエーションはまったくない。ベナレスが積載していた磁器はほぼこれに限定される。11は中国産又は日本産色絵磁器と考えられ、貴重な例である。16～21は中国産褐釉陶器である。胴部が張り口縁部が締まる壺形 (12～15) と寸胴で蓋が付く甕形? (16～21) がある。

これら同一器形の同一文様の青花や褐釉陶器については、沖縄の陸上遺跡出土資料はもとより、同じく19世紀代に位置づけられるインディアン・オーク号関係資料やファン・ポッセ号関係資料にも類例がみられず、謎の資料となっていた。しかし、サンフランシスコ在住郷土史家のデビット・コーツ氏から、アメリカ・カリフォルニアの中国人居留地遺跡 (中国人労働者遺跡) から同種の青花碗や褐釉陶器が多量に出土し、更に現地の資料館にも多数伝世しているとの情報を得た^{註2)}。実際にカリフォルニアでその調査を実施していないため確実とは言えないが、それが正しければ、これらの中国清朝陶磁器は、当時、苦力と呼ばれた中国人労働者達が主に使用していた陶磁器ということになる。2012年3月、ハワイのピショップ博物館の収蔵庫で同種の青花碗6点を確認することができた。すべて完形品のため、発掘資料ではなく伝世品と考えられる。19世紀後半、ハワイにも多数の移民が中国南部からやってきた社会背景がある。ピショップ博物館収蔵の青花碗も彼らが使用していたものであろう。

以上の事から、ベナレスが積載していた中国清朝陶磁器はアメリカへ出稼ぎに行った労働者、または移民した苦力達が使用していた、あるいは使用する予定であった陶磁器である可能性が高い。ベナレスの目的地はサンフランシスコであることもこれを裏

付ける。しかし、これらの陶磁器に関する記載はベナレス関連の文献記録には確認することができない。中国陶磁器は中世から海外輸出の主力的な商品のはずである。文献に記載されたものは茶・砂糖・米であり、何故商品として記載されていないのか疑問も残る。

ヨーロッパ製品 23・24はヨーロッパ陶器である。鉢もしくは皿形(23)と筒状の製品(24)がある。文様が描かれていたと考えられるが、長い年月を経て剥落したのだろう。25・26はヨーロッパガラス瓶でワイン瓶と考えられる。25の中には半分に欠けたコルクが入っていた。その他、27はバターナイフと考えられる金属製食器で、28は回収されていないが、金属製フォークである。

これらの資料はイギリス船員の持ち物と考えられ、ヨーロッパ陶器とフォークやバターナイフと言った金属製食器で食事を楽しむ姿が連想される。沈没船から回収されたワイン瓶やフォークと言った金属製食器類としては、北海道江差沖で座礁・沈没した榎本武揚の軍艦開陽丸(写真41)出土品が知られている(写真42・43)。明治政府と戦った彼らも船上では当時の西欧人と似たような食生活を楽しんだのかもしれない。

船体の残骸 29～32は真鍮製の断面方形の船釘である。大きさにバリエーションがある。33は木製の滑車である。前述した開陽丸の出土品には大きさや形が似た真鍮製船釘や木製滑車も見られる(写真44・45)。34は西欧鉄錨である。基部側1/3は復元されている。過去に宜名真沖海底から回収され、長い間、奥漁港の船繋具として利用されていたが、現在はその役目を終え、奥漁港にモニュメントとして展示されている。



写真40 ベナレス積載品(2005年調査)



写真40 ベナレス積載品(2005年調査)



写真41 復元された開陽丸



写真42 開陽丸出土ガラス製品

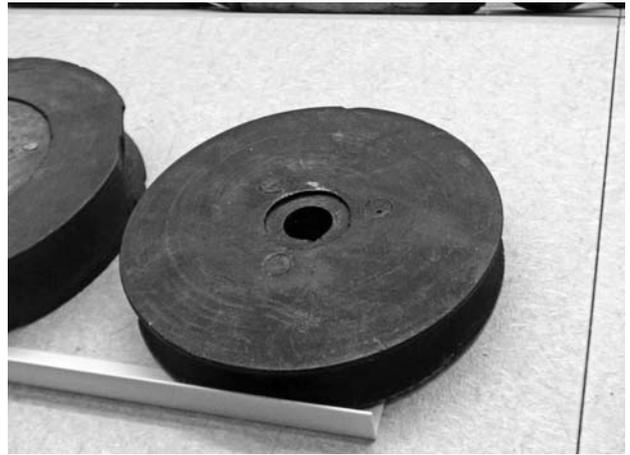


写真45 開陽丸出土木製滑車



写真43 開陽丸出土金属製食器類



写真44 開陽丸出土真鍮製船釘

7. 陸上に引き揚げられたベナレス関連遺物

ベナレス関連遺物には過去に陸上に引き揚げられ、様々な用途で転用されているものがある。それらもベナレスの実態を知る上で貴重な資料となる。

7-1 西欧鉄錨

ベナレスが使用していたと考えられる西欧鉄錨が奥漁港にモニュメントとして展示されている(図2・図5(34)・写真46)。地元では「ウランダハナグ」と呼ばれており、ベナレス沈没後、宜名真海底から引き揚げられ、奥漁港に笛の停泊具として長い間使用されていたが(写真47)、1981年、その役目を終え現在の場所に移動されたようだ(奥のあゆみ刊行委員会1986)。展示品は完全な形をしているように見えるが、基部であるアンカーストック側1/3はもともと破損しており、復元したものである。ベナレスは2本の鉄錨を使用していたようで、もう1本



写真46 奥漁港の西欧鉄錨

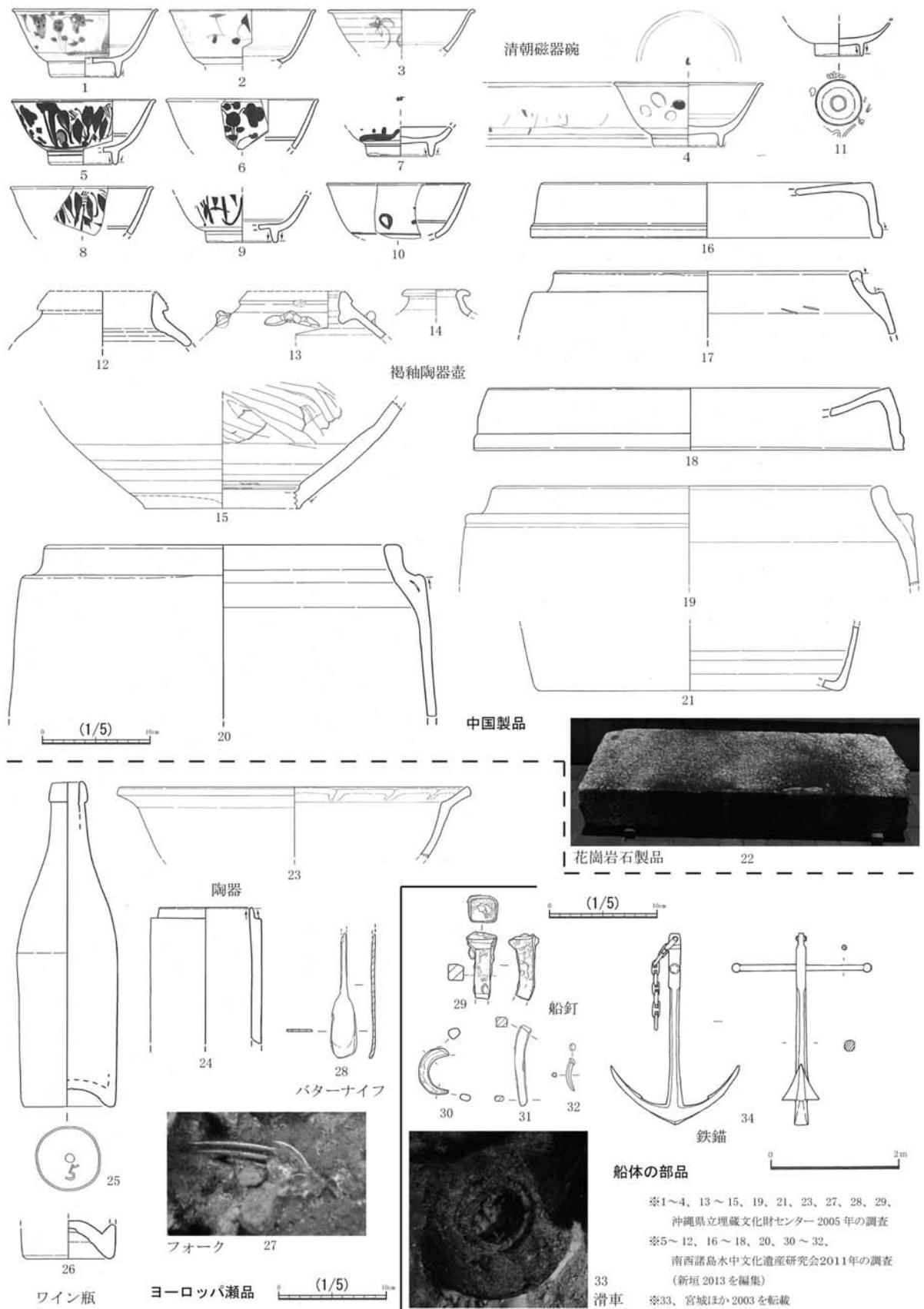


図5 宜名真沖海底遺跡出土、ベナレス積載品



上はウランダハナグ、長い間奥湾に停泊する船の係留に大きな役割を果たして来たが、奥港の築港のため昭和56年に海中から撤去されて、現在は前浜で台座に飾られ、保存されている。 宇誌「奥のあゆみ」より

写真47 使用中の奥の鉄錨

は溶かして農具等に転用されたと伝承されている。

西欧鉄錨はアンカーストックを鉄とするものと、木とするものがある。木とするものが古いタイプと考えられるが、両者が共存している時期もあったと思われ、詳細は不明である。ペナレスが使用した鉄錨はどちらのタイプであるのか、アンカーストック部分が破損しているため現状では知ることが出来ない。

ここでは幾つかの西欧鉄錨を参考に紹介する。南西諸島では多良間村島の多良間村立図書館に西欧鉄錨が保管されている。これは、1857年に多良間島高田海岸で座礁・沈没したオランダ船ファン・ボッセ号（船長：ハーゲマン）のものとされており、アンカーストックが木製のタイプである（写真48）。この事件に関しては金田（2001）に詳しく紹介されている。

日本国内でも西欧鉄錨の確認例は少ないが、北海道の釧路漁港には木製アンカーストックタイプ（写真49）が、木古内町教育委員会には鉄製アンカーストックタイプ（写真50）が、静岡県戸田造船資料館には木製アンカーストックタイプ（写真51）と鉄製アンカーストックタイプ（写真52）が確認されている。北海道釧路の木製アンカーストックタイプは2008年に引き揚げられたもので、アンカーストックが完全な形で残っている極めて貴重な事例であり、注目される（北海道新聞2011）。木古内町のものは、幕府軍艦咸臨丸が装備していたものと伝わっている^{註3}。静岡県戸田の木製アンカーストックタイプのものはロシア軍艦ディアナ号が装備していたもの



写真48 ファン・ボッセ号の鉄錨



写真49 北海道釧路西欧鉄錨



写真50 北海道木古内町咸臨丸西欧鉄錨



写真51 静岡県戸田ディアナ号西欧鉄錨

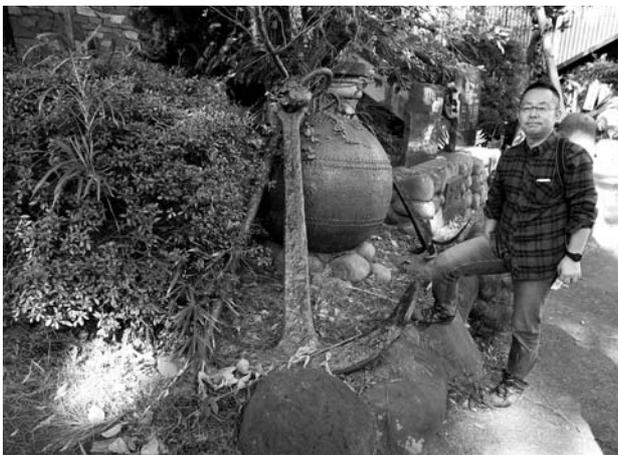


写真52 静岡県戸田小型西欧鉄錨

とされている^{註4)}。アンカーストックが鉄製のものと木製のもの、両方が確認されていることは幸いであり、今後、形態的特徴の比較検討を行う事によって、ベナレスが使用していたアンカーストックのタイプが復元できる可能性もある。

7-2 方形石製品

ベナレス積載品には方形に加工された巨大な花崗岩石材もあり、様々な地域で転用され使用されている(第2図、宮城・片桐他2004)。

ベナレスが座礁・沈没した宜名真集落にはオランダ墓という墓碑が立っているが、その脇は、まさに漂着した遺体を埋めた場所と考えられ、12個の方形石製品が墓の縁石としてまわりを囲むように埋設されている(写真2)。国頭村奥には奥交流館の野外にベナレス積載品として1個展示されている(写真53)。同じく国頭村宇嘉集落には8個の方形石製品が確認され(写真54)、この石はかつて共同墓地として利用されていたという(宮城1989)。大宜味村大兼久には大宜味村役場敷地内において「靈魂の塔」の石碑として1個転用されている(写真55)。今帰仁村上運天には源為朝上陸の碑として1個転用され使用されている(写真56)。この他、親川栄氏から



写真53 国頭村奥交流館の方形石製品



写真54 国頭村宇嘉集落



写真55 大宜味村靈魂の塔



写真56 今歸仁村為朝上陸の碑

の情報により、国頭村奥間の新地門中の岩墓の屋根として利用されているというが、現在はモルタルで覆われており、その数量等を確認することができなかった。以上、計23個+の花崗岩方形石製品が陸上に引き揚げられ何等かに利用されている状況が確認されている。

この方形石材は、いずれもその規格が厚み16~21 cm、幅58~61 cm、長さは大きいもので310 cmを測り、規格的なものである。用途としては、航行中は船体を安定させるバラストとして利用されたと考えられるが、これ自体が建築材等の商品だった可能性は高い。船体を安定させるバラストは重ければ良く、中世貿易船では陶磁器や銭等がバラストの役割を果たしていたし、そのような重い積荷がない場合はわざわざ円礫等を運び込み船底に敷き詰めていた。ベナレス積載品は花崗岩を使用しており、極めて規格的であり大きさは3mを超えるほどのものがある。このことから、もともとバラストとして積載されたものでなく、あくまで石材(商品)として積載していたものがバラスト機能をもっていた可能性が高い。

このような花崗岩方形石製品は宮古島吉野海岸沖やその集落でも確認されている(宮城・片桐2004、片桐2010 aなど)。吉野海岸沖の海底にはやはり規格的な花崗岩方形石製品が無数に散布する状況が確認されており、異国船の積荷と考えている。規格のバリエーションは豊富で、大きいものではやはり3mを超える棒状のもの(写真57)、ベナレス積載品と同様やや平たい形態をしたものなどがある(写真58)。吉野集落ではやや小型の方形石製品が民家の軒先に置かれており、吉野海岸から回収してきたものと言われている(写真59)。この水中遺跡も異国船に関するものと考えられ、多数の方形石製品はやはり商品として積載されていたものであろう。

これらバラストとしても利用された石材の産地はどこだろうか。ベナレスが香港を出発したこと、石材が花崗岩であること、中国清朝陶磁器も積載していることを考えると中国産である可能性は高い。実際、香港の天后宮の建設にはよく似たサイズの方形花崗岩が多量に利用されていた(写真60・61)。また、1870年代の香港のビクトリア湾の写真には多量の方形石材が港に集積されている状況が確認できる(香港歴史博物館1994)。ベナレス積載の方形花崗岩



写真57 吉野海岸沖方形石製品 1



写真59 吉野集落方形石製品



写真58 吉野海岸沖方形石製品 2



写真60 香港の天后宮

も香港やその周辺が産地である可能性は充分考えられる。今後、ペナレスや吉野海岸沖の異国船が積載していた方形石製品の詳細な石材同定と原産地の石材同定を行う事によって、明らかとなる。また、何故、このように規格的で巨大な石材がペナレスの目的地であるサンフランシスコで必要だったのか、当該時期のアメリカ西海岸の事情を反映している可能性があり、今後の研究課題である。

異国船が円礫・亜角礫をバラストとして積載している事例も確認されており、南西諸島では1840年に北谷町北谷沖で座礁・沈没したイギリス船インディアン・オーク号(写真62、中村1994)、多良間島の西欧鉄錨として紹介した1857年に高田海岸沖で座礁・沈没したオランダ船ファン・ボッセ号(写真63、片桐2009)、1876年にうるま市南浮原島沖で座礁・沈没したと考えられる国籍不明の異国船(写真64、片桐2009)がある。これらは、ペナレスや宮古島吉野



写真61 香港の天后宮に使用されている方形花崗岩

海岸沖の船が商品ともなる方形花崗岩石材をバラストとしても利用したのに対し、商品とはならない円礫や亜角礫を、純粋に船を安定させるために利用した例である。バラストの代わりとなるような重い商品を積載していなかったことがわかる。



写真62 北谷沖インディアン・オーク号のバラスト



写真63 高田海岸沖ファン・ポッセ号のバラスト

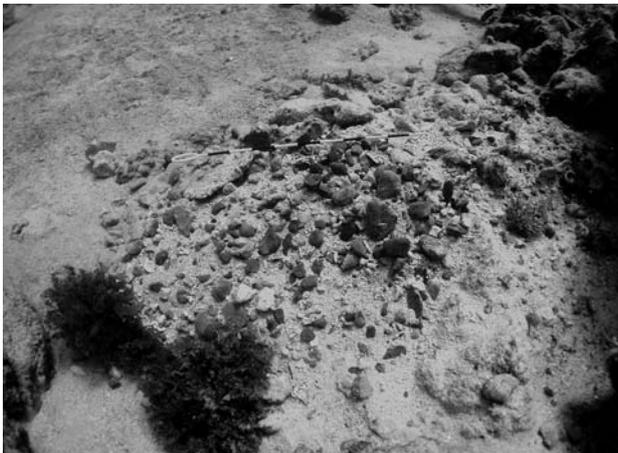


写真64 南浮原島沖海底の異国船バラスト

8. まとめと課題

1872（明治5）年9月、イギリス船ベナレス（船長：ジェームス・アンダーソン）は18名の乗組員とともに、当時、イギリス領であった香港を出港しアメリカのサンフランシスコへ向かった。船には商品

として茶・米・砂糖（F.O.17）が積載されていた他、中国清朝陶磁器、巨大な方形花崗岩石材（遺跡資料）も積まれていた。しかし、ベナレスはその目的を達することができず、琉球藩となったばかりの沖縄宜名真海岸沖で座礁・沈没した。船長やその息子を含む乗組員13名が死亡し、内4名の遺体が地元民によって宜名真集落の南のはずれに埋葬された。墓の縁石として、ベナレスが積載していた方形花崗岩製品（3mを越えるものもある）が12個利用されている。現在は立派な墓碑も建設され、当時を偲ぶことができる。

5名の生存者達は無事保護され琉球列島を後にすることができた。彼らの記録がイギリス側文献として残されており、当時の様子を詳細に知ることができる。

ベナレスが沈没した海域には、今も、船釘や滑車、銅板といった船の残骸、船員達が使用したと考えられるヨーロッパ陶器や金属製食器、ワイン瓶、アメリカへ渡った中国人労働者（いわゆる苦力）が利用するはずだったと考えられる中国清朝陶磁器が遺物として残されている。また、海底に沈んでいた西欧鉄錨や方形花崗岩製品は過去に海底から引き揚げられ、たくましい島民によって再利用された。西欧鉄錨の1本は溶かして別の農耕具等別の鉄製品へと姿を変え、残りの1本は辺戸岬を越えた奥集落の漁港で船繫具として、長い間、船の係留に役立っていた。現在はその役目を終え、奥漁港にモニュメントとして展示されている。方形花崗岩石製は最も有効に再利用されており、宇嘉集落や奥間集落の墓石として利用された。さらに、大宜味村では慰霊碑として、今帰仁村では為朝上陸の碑として現在でも利用されつづけている。

本来、イギリス船ベナレスはイギリス、中国、アメリカを結ぶ交易史に記録が残るだけのものだった。しかし、琉球列島で座礁・沈没する海難事故によって、沖縄までが国際的事件の当事者となった。

本研究によって、宜名真集落のオランダ墓を手掛かりに新しい文献記録を探索することができ、記録に残されたベナレス漂着事件の詳細を知ることができた。そして、海底や陸上に残された考古学的資料によって文献だけではうかがうことができないベナレスの物質的実態を明らかにすることができた。本

事例は水中遺跡、陸上遺物、琉球・日本史料、イギリス史料、伝承が豊富に揃う歴史的意義ある事件とその研究となった。その結果、琉球王国末期に琉球列島を航行した西欧列強異国船の構造や性格、アジア・アメリカを結ぶ太平洋海域の物資流通、琉球王国における漂着船・漂着者の対応、沈没船のその後など、沖縄だけでなく、イギリス、中国、アメリカと言った国際化が進む19世紀後半の社会動態の一端をより実証的に知ることができた。

今後の課題として、アメリカ西海岸の中国人居留地遺跡やハワイ等で確認されており、ペナレスも積載していた特徴的な中国清朝陶磁器の産地やその流通過程、消費方法、方形花崗岩石材の消費地での使用方法とアメリカでの需要の背景、そして今は遺跡に残された残骸から断片的な姿しか想像することができないペナレスの船体の姿を調査する必要がある。沈没船遺跡とは、悲惨な海難事故が原因となって形成され本来そこに存在するはずではなかったものである。それらは文献記録として、遺跡として、そして伝承として現在も残されており、我々が当時の社会を知ることがきる貴重な資料となっている。しかし、これら異国船の漂着・沈没事件は過去のものとして文献や遺跡にだけ残されているのではない。船の残骸や積荷は海底から引き揚げられ、貴重な島の資源として様々な形で現代まで再び利用され、現在へと繋がる沖縄の歴史・文化の一翼を担っている。



写真65 ペナレス出港地・香港ビクトリア湾

謝 辞

本研究は多くの方々との共同調査・研究によってなされた。また、実施にあたっては平成24年度笹川科学研究助成金を得た。末尾となりますが、記して深く感謝申し上げます。

アジア水中考古学研究所、赤嶺信哉、翁長武司、親川栄、木口祐史、喜納大作、木元豊、黒沢健明、小西美香、崎原恒寿、塩屋勝利、島袋綾野、新里亮人、新里貴之、常松幹雄、輝広志、デビット・コーツ、中山晋、新居洋子、比嘉尚輝、林原利明、藤島一巴、松尾直子、松永洋平、宮城邦昌、宮城宏光、森靖裕、山田浩久、渡辺芳郎

註

註1 . 1874 (明治7) 年と記載されているが、渡辺美季・新居洋子の調査によって実際には1872 (明治5) 年の事件であることが判明した。

註2 . カリフォルニア在住の郷土史家デビット・コーツ氏からの情報である。氏はカリフォルニアで中国人労働者遺跡の発掘調査を行い、実際にペナレス積載品と同種の中国清朝陶磁器を発掘したと聞く。旅行先の宮古島市博物館で偶然にも沖縄県立埋蔵文化財センターが刊行した概報『沿岸地域遺跡分布調査 () ~ 沖縄本島・周辺離島編 ~』 (片桐2007) を読み、自分が興味あった同種の中国清朝陶磁器が宜名真沖海底遺跡から回収されていることを知り、わざわざ沖縄本島の片桐まで訪ねてくれた。氏のご教示によって、これまで不明であったペナレスが積載していた中国清朝陶磁器の性格の一端と今後の調査の方向性を掴むことができた。深く感謝します。

註3 . 木古内町教育委員会の木元豊氏からのご教示・ご案内による。

註4 . アジア水中考古学研究所林原利明氏からのご教示、ご案内による。

写真・図

図1 . 沖縄県立博物館・美術館所蔵

図3 . 片桐千垂紀 (編) 『沿岸地域遺跡分布調査概報 () ~ 遺跡地図・概要編 ~』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第55集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010年より転載

写真3．宮城邦昌氏提供

写真7・9・10・12・14～34．山本祐司氏提供

写真35～38・40．沖縄県立埋蔵文化財センター提供

写真42．奥のあゆみ刊行委員会（編）『奥のあゆみ』
1986年より転載

参考文献

赤嶺誠紀1988 『大航海時代の琉球』沖縄タイムス社

新垣力2013 「沖縄県における沿岸遺跡採集陶磁器について」『海の文化遺産総合調査報告書 - 南西諸島編 -』アジア水中考古学研究所・南西諸島水中文化遺産研究会・鹿児島大学法文学部物質文化論研究室（印刷中）

奥のあゆみ刊行委員会（編）1986 『奥のあゆみ』奥のあゆみ刊行委員会

片桐千亜紀（編）2007 『沿岸地域遺跡分布調査概報（ ）～沖縄本島及び周辺離島編～』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第37集 沖縄県立埋蔵文化財センター

片桐千亜紀（編）2009 『沿岸地域遺跡分布調査概報（ ）～宮古・八重山諸島編～』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第52集 沖縄県立埋蔵文化財センター

片桐千亜紀（編）2010 a 『沿岸地域遺跡分布調査概報（ ）～概要・遺跡地図編～』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第55集 沖縄県立埋蔵文化財センター

片桐千亜紀2010 b 「2009年度・南西諸島域における水中文化遺産調査報告 5-2現地調査（3）第三次調査」『水中考古学研究所』第3号 アジア水中考古学研究所

金田明美 2001 「多良間島沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証」『日蘭学会会誌』26(1)

国頭村役場（編）1967 「オランダ墓」『国頭村史』

島袋源一郎1919 「オランダ墓」『沖縄県国頭郡志』国頭郡教育委員会編 沖縄出版会

須藤利一1974 『異国船来琉記』法政大学出版局

田島信洋2011 『石垣島唐人墓の研究～翻弄された琉球の人々～』郁朋社

中村愿 1994 「インディアン・オーク号の座礁地」

『北谷町の遺跡』北谷町文化財調査報告書第14集
北谷町教育委員会

西里喜行2005 『東洋史研究叢刊之六十六（新装版4）

清末中琉日関係史の研究』京都大学学術出版会

山口栄鉄2000 『外国人来琉記』琉球新報社

宮城弘樹・片桐千亜紀・新垣力・比嘉尚輝 2004年

「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査 - 海洋採集遺物からみた海上交通 -」

『沖縄埋文研究2』沖縄県立埋蔵文化財センター

宮城弘樹・片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿 2005年「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査（ ） - 海洋採集遺物からみた海上交通 -」『沖縄埋文研究3』沖縄県立埋蔵文化財センター

宮城幸三郎1989 「第七章 祭事と行事 宇嘉の共同墓地（村墓）」『宇嘉に生きる：山は緑に水清く』宮城幸三郎

渡辺美季2010 「2009年度・南西諸島域における水中文化遺産調査報告 6．文献調査」『水中考古学研究所』第3号 アジア水中考古学研究所

渡辺美季・新居洋子2013 「第4章第19項 宜名真漂着のイギリス船ベナレスについての調査成果」

『海の文化遺産総合調査報告書 - 南西諸島編 -』

アジア水中考古学研究所・南西諸島水中文化遺産研究会・鹿児島大学法文学部物質文化論研究室（印刷中）

北海道新聞2011.9.9

香港歴史博物館1994 『四環九約 CITY OF VICTORIA』香港市